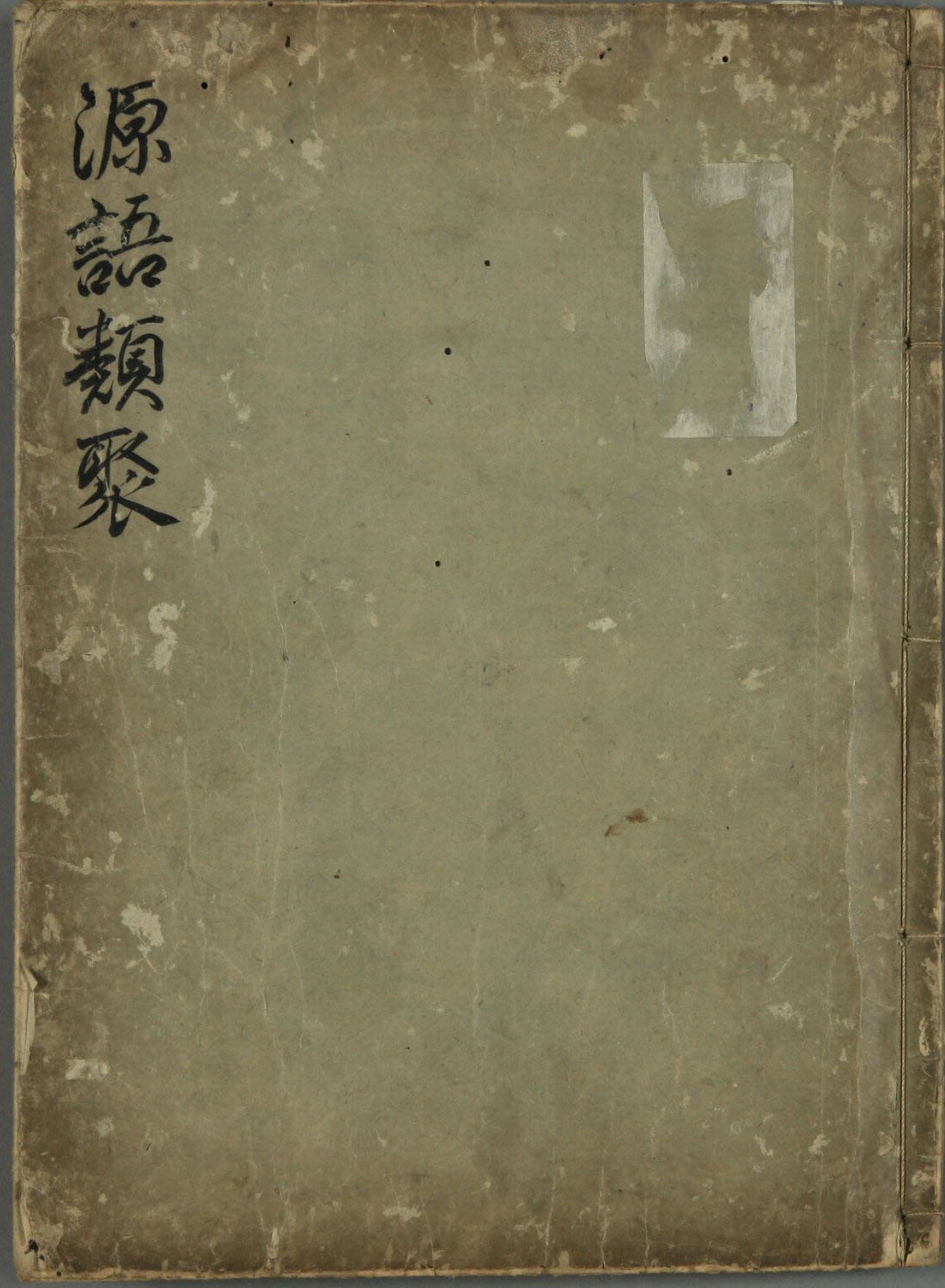
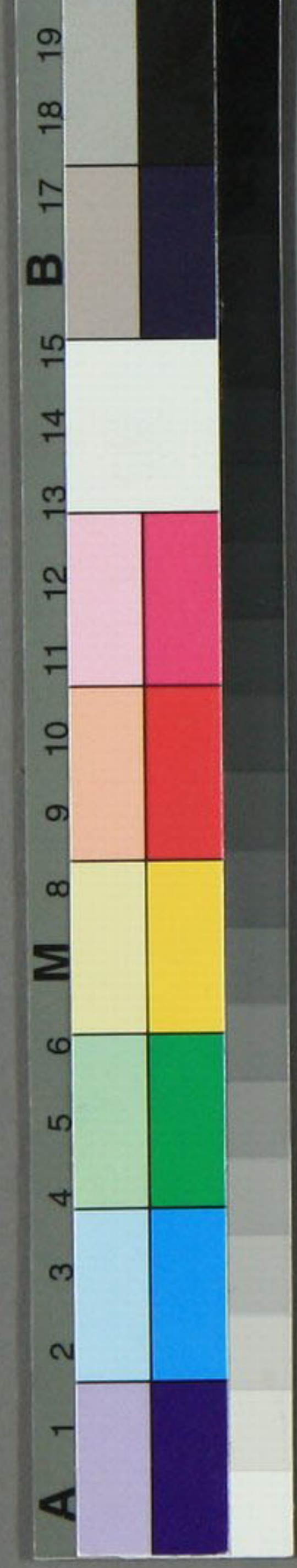






いふも山を乃ふなり

いふも山 いふも山なり

いふも山 同上墨案いふものなり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いふも山 いふも山なり

いり 可畏

いぬき いぬきうてくちうて

いぬ いぬいせうもていぬ

いほ 龜也

いほ いほのりあき

いほ 辭也

いほ 有職又右族也華族

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いたち 起也

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いほ いほのりあき

いり 起也

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

いり いりし水

はうし云々

もろく

八首にめては

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

八首にめては

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

もろく

とくうせう
り

來世始
荀也

春鳥也 果鳥万
又客也 白鳥万

ちぬひま
無事也。ちぬひま女をくひひも人のひひも。あるは人
のひひも。あるは人のひひも。あるは人のひひも。

天竺之也
天竺也

ちすの
 竊実也私云林仙帝蓮子とありあやそもとの心を象へる盃の
 後にあやそく竊実の心あり
 不血やうき酌心

夏
宮中遊水原日以外禁部とあり
其外は山崎氏より一名

女御とあるは
あふもほけうとも色くも御くとるぬ
さうり一思事防りする後ふも見たさす

おれさうなりやうそおもふなふ
いそしにもおこりやうそ

二乃
はるる

まゝしてあそびし
 二のまはるゝ若ハ今このまにけりや成るまじやう
 みゝる曼珠二天はゆふふ我都せ也 ころ君はうやせやう

ちてあひくちこの源を
 うつちまゝのあまをまゝ
 小字明子 不二人間私云無以恥と
 此ハ明子方也

に
海
川也

心也

母をたもつ

不
不
不

豁也朗日廊日

かうひたぐ物
縮櫃也

月人
中

漫録

流離也又放將

元元
 榮光 之日 紅貝 昇記
 三乃 志 志 志

すべし人の心もさあなれん
のち也

大糸子

ありあふてもその心を即棄して八極の
 方へ

京都府三木市三木町三木一丁目

[illegible]

二
三

廿二也一
子也

二乃家^れより手^て見^みこい^こふ^ふ

今よのめこけふも或るまじう
一夫一婦ふれども也 又君のついで也なり

小字明子 不為人知云云以記之
其說方寸也

にきり
馬鏡也 又膽也
にきり

か
とく

月夜思
項戴

火氣也

知
本

𠂔
𠂔字也
𠂔字也

法界三昧普賢大士

大唐南院和尚礼云南無がびんしん人喜
薩三ありかろこ大士といひ事せばかういふ人

かゝる人なりやうかへ

かゝる僧都

法務也

目

法界又法界なり

目

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

かゝる僧都

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

かゝる僧都

同日 側目

うしほありいりて うしほりて

うみ 試樂也

ちりしき ちりしき

新説

ちりしき ちりしき

ちすのさぬ ちすのさぬ

ちすのさぬ ちすのさぬ

ちすのさぬ ちすのさぬ

ちすのさぬ ちすのさぬ

ちすのさぬ ちすのさぬ

うき もろ 長食せんもけいといふ

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

新説

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

ちりしき ちりしき

おはら ちぬ 御所 日記記

おがら山 山に寺あり後わて
おがら山とありけり

おはや 海 日本國也

おがき 天皇也 二位 天皇也 多葉 二位と
いふかきと位といふ

おとこ 男 男端耳也

おら おら 男 男端耳也

おら 普通のおら 男 男端耳也

おら 男 男端耳也

おら 男 男端耳也

御と、 源氏のあはれ 御と 男 男端耳也

大宮

おがき 天皇也 四位 天皇也 多葉 四位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 五位 天皇也 多葉 五位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 六位 天皇也 多葉 六位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 七位 天皇也 多葉 七位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 八位 天皇也 多葉 八位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 九位 天皇也 多葉 九位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十位 天皇也 多葉 十位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十一位 天皇也 多葉 十一位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十二位 天皇也 多葉 十二位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十三位 天皇也 多葉 十三位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十四位 天皇也 多葉 十四位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十五位 天皇也 多葉 十五位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十六位 天皇也 多葉 十六位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十七位 天皇也 多葉 十七位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十八位 天皇也 多葉 十八位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 十九位 天皇也 多葉 十九位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 二十位 天皇也 多葉 二十位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 二十一位 天皇也 多葉 二十一位と
いふかきと位といふ

おがき 天皇也 二十二位 天皇也 多葉 二十二位と
いふかきと位といふ

起 驕

おはすけ おはすけ

おはす おはす

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

おは おは

わさかめ
自漬也

三
癰病
子方

わが
か
和也

王女御

あやうじとあきつ親王冷泉院まゝりて
王如御とくまうすゝてり

王氣付也

かゝる
いふに、これよりさうなり
あらざるものあり

いづいふの神やてきうと祢はありひつるう
おとみうらふの神はかりてそとをえたり

かゝる

視其私屏 旦記
又頂石尺

海仙樂

海青示
一名也

かみ

扇也。ひれとて
ひれふりてとて

かむろうな

るはあすきしけ
なり也

うしあを

陳也或說舊也字亦作說筆也尚說之
之字味方東田記說以下字與潘允

不ふ々ふ々ふ

有るは此よりハわすくまみち山吹の花にかふみけ
こころを物案が成心ゆすや**百景**八巻より後これ

野人の花もひよみていはれすこほくこなるゝ家指う政と大娘。
 子多きとてはるいてこそゆるめ申されのうとてもあらうやうすのふ
 かにみてこゝろ人といふこころめ秋の花をつつき也春日と山吹にひまわり
 心きハおろくこそきこへしとていふとハ客花こゝろ日ふくられほりたりと
 みてり

哭

鄭の儀はふく祿を
 其のすゝい志祿を

うたへもあこがれなり。或は之をさるもの思案たり。ハあつては
うらなふべきことゆゑに、**八**ふもかゝりしはこれの事。家にも見す可くなく
しも花鳥にとふ也。
わとハ上の口より角

以三乃

板梁廣大右の在而也。其の
喜多山而也。玉葉は江川人

中略

礼記月令曰 季夏蟋蟀居壁
そのかう古詩わけてるるるるるる

史中
復也

かた

聖代也

也。中紀云。是月又云。廬也。

一
 季 冬 寒 風 烈 矣
 季 冬 寒 風 烈 矣
 季 冬 寒 風 烈 矣

山陽守を以て
千公事
あり

230

射也

かきいさう 将也

かきえん 捨上篋

かき もをける也或はこれのふれよとのひいふともふへきを或はこれ

かき 片老毛

かき 片老毛

かき 好くする也

かき 英明かぬこの

かき かきいさうもあて雷にや

かき 東山記中一云端壁を端肥若沫を壁敷くといふ未蓋焉并れ天小の

かき 記念

かき ね手也

かき 迎陵頻伽にふれよといふけのかきやのきなりけの

かき 不難也 愚案

かき かきき乃

正張畫者純延六月住

正張畫者純延六月住

くられ 唐人のき

くら 名残乃

くら くらきの人

くら くらきの人

くら くらきの人

くら くらきの人

くら 紙金也

くら 髪也

くら くらきの人

くら くらきの人

かきいさうく 将表也

かきえんこ 捨上篋

かきね もをねる也或は此のふれよとのひいさうもふへきを別案いけり

かきか 片老毛

かきと 片ヤ 早記

かきむ 好くまき也

かきか将 英明かねるの
一宿の事あり

かきいさかともあて雷にや 地のことなり或は此
知せまうねり

別案見記中一云端壁を端肥若沫を壁敷くこと未盡焉并れ天下の
一時也此太朴怖畏と有り終て威とありい終るすことつるを女朴の
かきまはしめたる人はいひる也
まかんがとつるあつる

かきん 記念
信

かきみ かきみ
ね手也

かきうひん 迎陵頻伽 ひん ちち ひん けのかき ひん のさき ひん けの
まき ひん にい ひん 頻伽を卯中聲 ひん 勝衆 ひん 馬也

かき 次 不難也 愚案
おのり

かきき 乃 不
まき ひん とく

かき 紫
み

かきひ き
ふ

かき 海り
らん

かき す 確也

かき れ 唐人の
まき

かき 國は名成乃
まき

かき き の まき
まき

かき 人乃袖
まき

かき まき ひん の
まき

かき まき ひん の
まき

かき 紙
まき

かき 髪也

かき す ひん の
まき

かき まき ひん の
まき

かきまゝこふて

廣陵教也

これにひひ

香と入る

かき

高巾子なり

ふねは入る也身のこも三寸からいりて守りて

かき

香やあられ一動事也
考詳不意り即就

かき

右の樂久なり御案を中より
并にありふたやまのりのを

くちやにわらん者の人

豊島文君のいんじん
の人となり水原のいんじん

かいて

くちやのいんじんなりとふ也又平均のいんじん
なりこれらなるなりとも同事也

かき

降魔のね

くちや

也

くちやもり

かき

豊島文君のいんじん
なりこれらなるなりとも同事也

昂化才云 端堅底端肥 若味 若味 敬

素盞鳥尊 天照太神 怖畏威

頻伽生 卯中 腹 衆 也

かき 汗 移也

かき 頂 中

かき 神 宿也

紙 抄 あり あり あり あり

かき 父 ありて

かき 父 ありて

徳康教宿治而有容授也

かき 事 せて

家也

かき 事 せて

香 蓋 也 或 調 友

かき 事 せて

隠 事 也

かき 事 せて

かき 事 せて

かき 事 せて

かき 事 せて

かき 事 せて

かき 事 せて

かき 事 せて

かき 事 せて

かまふにふて

廣陵教也

華康 秋宿洛而有客授以

3
4
5
6
7
8

香と入る
地

何事もして

高家也

かろ

高巾子うり

かゝる

香土壘造也或調方
りてれどもとてけ

只也入令也身のこも手かひりてみずく
なりてこもなり又云者秘集也

か

其也者一動事也
考辭不意昂就

明皇之事

隱中
隱棲也

王

右の樂久より西樂主より
并々にありふたやまのせを

くちやにわらん者の人

雲の文君をいふんじう
 の人とわり水原のいふみより

かいきて

うやのーとふとふ也又平均のつぎ

うぬ

降魔のね

三

也

子
子
子
子
子

か

聖言也 秘文にて之を
 秘するは 秘文なり

とるくや又事也而きふく一動衆ハカハ二祝ハ三喜ハ四喜ハ五喜ハ六喜ハ七喜ハ八喜ハ九喜ハ十喜ハ十一喜ハ十二喜ハ十三喜ハ十四喜ハ十五喜ハ十六喜ハ十七喜ハ十八喜ハ十九喜ハ二十喜ハ二十一喜ハ二十二喜ハ二十三喜ハ二十四喜ハ二十五喜ハ二十六喜ハ二十七喜ハ二十八喜ハ二十九喜ハ三十喜ハ三十一喜ハ三十二喜ハ三十三喜ハ三十四喜ハ三十五喜ハ三十六喜ハ三十七喜ハ三十八喜ハ三十九喜ハ四十喜ハ四十一喜ハ四十二喜ハ四十三喜ハ四十四喜ハ四十五喜ハ四十六喜ハ四十七喜ハ四十八喜ハ四十九喜ハ五十喜ハ五十一喜ハ五十二喜ハ五十三喜ハ五十四喜ハ五十五喜ハ五十六喜ハ五十七喜ハ五十八喜ハ五十九喜ハ六十喜ハ六十一喜ハ六十二喜ハ六十三喜ハ六十四喜ハ六十五喜ハ六十六喜ハ六十七喜ハ六十八喜ハ六十九喜ハ七十喜ハ七十一喜ハ七十二喜ハ七十三喜ハ七十四喜ハ七十五喜ハ七十六喜ハ七十七喜ハ七十八喜ハ七十九喜ハ八十喜ハ八十一喜ハ八十二喜ハ八十三喜ハ八十四喜ハ八十五喜ハ八十六喜ハ八十七喜ハ八十八喜ハ八十九喜ハ九十喜ハ九十一喜ハ九十二喜ハ九十三喜ハ九十四喜ハ九十五喜ハ九十六喜ハ九十七喜ハ九十八喜ハ九十九喜ハ百喜ハ百一喜ハ百二喜ハ百三喜ハ百四喜ハ百五喜ハ百六喜ハ百七喜ハ百八喜ハ百九喜ハ百十喜ハ百十一喜ハ百十二喜ハ百十三喜ハ百十四喜ハ百十五喜ハ百十六喜ハ百十七喜ハ百十八喜ハ百十九喜ハ二百喜ハ二百一喜ハ二百二喜ハ二百三喜ハ二百四喜ハ二百五喜ハ二百六喜ハ二百七喜ハ二百八喜ハ二百九喜ハ三百喜ハ三百一喜ハ三百二喜ハ三百三喜ハ三百四喜ハ三百五喜ハ三百六喜ハ三百七喜ハ三百八喜ハ三百九喜ハ四百喜ハ四百一喜ハ四百二喜ハ四百三喜ハ四百四喜ハ四百五喜ハ四百六喜ハ四百七喜ハ四百八喜ハ四百九喜ハ五百喜ハ五百一喜ハ五百二喜ハ五百三喜ハ五百四喜ハ五百五喜ハ五百六喜ハ五百七喜ハ五百八喜ハ五百九喜ハ六百喜ハ六百一喜ハ六百二喜ハ六百三喜ハ六百四喜ハ六百五喜ハ六百六喜ハ六百七喜ハ六百八喜ハ六百九喜ハ七百喜ハ七百一喜ハ七百二喜ハ七百三喜ハ七百四喜ハ七百五喜ハ七百六喜ハ七百七喜ハ七百八喜ハ七百九喜ハ八百喜ハ八百一喜ハ八百二喜ハ八百三喜ハ八百四喜ハ八百五喜ハ八百六喜ハ八百七喜ハ八百八喜ハ八百九喜ハ九百喜ハ九百一喜ハ九百二喜ハ九百三喜ハ九百四喜ハ九百五喜ハ九百六喜ハ九百七喜ハ九百八喜ハ九百九喜ハ千喜ハ千一喜ハ千二喜ハ千三喜ハ千四喜ハ千五喜ハ千六喜ハ千七喜ハ千八喜ハ千九喜ハ千十喜ハ千十一喜ハ千十二喜ハ千十三喜ハ千十四喜ハ千十五喜ハ千十六喜ハ千十七喜ハ千十八喜ハ千十九喜ハ二千喜ハ二千一喜ハ二千二喜ハ二千三喜ハ二千四喜ハ二千五喜ハ二千六喜ハ二千七喜ハ二千八喜ハ二千九喜ハ三千喜ハ三千一喜ハ三千二喜ハ三千三喜ハ三千四喜ハ三千五喜ハ三千六喜ハ三千七喜ハ三千八喜ハ三千九喜ハ四千喜ハ四千一喜ハ四千二喜ハ四千三喜ハ四千四喜ハ四千五喜ハ四千六喜ハ四千七喜ハ四千八喜ハ四千九喜ハ五千喜ハ五千一喜ハ五千二喜ハ五千三喜ハ五千四喜ハ五千五喜ハ五千六喜ハ五千七喜ハ五千八喜ハ五千九喜ハ六千喜ハ六千一喜ハ六千二喜ハ六千三喜ハ六千四喜ハ六千五喜ハ六千六喜ハ六千七喜ハ六千八喜ハ六千九喜ハ七千喜ハ七千一喜ハ七千二喜ハ七千三喜ハ七千四喜ハ七千五喜ハ七千六喜ハ七千七喜ハ七千八喜ハ七千九喜ハ八千喜ハ八千一喜ハ八千二喜ハ八千三喜ハ八千四喜ハ八千五喜ハ八千六喜ハ八千七喜ハ八千八喜ハ八千九喜ハ九千喜ハ九千一喜ハ九千二喜ハ九千三喜ハ九千四喜ハ九千五喜ハ九千六喜ハ九千七喜ハ九千八喜ハ九千九喜ハ万喜ハ万一喜ハ万二喜ハ万三喜ハ万四喜ハ万五喜ハ万六喜ハ万七喜ハ万八喜ハ万九喜ハ十万喜ハ十万一喜ハ十万二喜ハ十万三喜ハ十万四喜ハ十万五喜ハ十万六喜ハ十万七喜ハ十万八喜ハ十万九喜ハ百万喜ハ百万一喜ハ百万二喜ハ百万三喜ハ百万四喜ハ百万五喜ハ百万六喜ハ百万七喜ハ百万八喜ハ百万九喜ハ千万喜ハ千万一喜ハ千万二喜ハ千万三喜ハ千万四喜ハ千万五喜ハ千万六喜ハ千万七喜ハ千万八喜ハ千万九喜ハ億喜ハ億一喜ハ億二喜ハ億三喜ハ億四喜ハ億五喜ハ億六喜ハ億七喜ハ億八喜ハ億九喜ハ十億喜ハ十億一喜ハ十億二喜ハ十億三喜ハ十億四喜ハ十億五喜ハ十億六喜ハ十億七喜ハ十億八喜ハ十億九喜ハ百億喜ハ百億一喜ハ百億二喜ハ百億三喜ハ百億四喜ハ百億五喜ハ百億六喜ハ百億七喜ハ百億八喜ハ百億九喜ハ千億喜ハ千億一喜ハ千億二喜ハ千億三喜ハ千億四喜ハ千億五喜ハ千億六喜ハ千億七喜ハ千億八喜ハ千億九喜ハ万億喜ハ万億一喜ハ万億二喜ハ万億三喜ハ万億四喜ハ万億五喜ハ万億六喜ハ万億七喜ハ万億八喜ハ万億九喜ハ十萬億喜ハ十萬億一喜ハ十萬億二喜ハ十萬億三喜ハ十萬億四喜ハ十萬億五喜ハ十萬億六喜ハ十萬億七喜ハ十萬億八喜ハ十萬億九喜ハ百萬億喜ハ百萬億一喜ハ百萬億二喜ハ百萬億三喜ハ百萬億四喜ハ百萬億五喜ハ百萬億六喜ハ百萬億七喜ハ百萬億八喜ハ百萬億九喜ハ千萬億喜ハ千萬億一喜ハ千萬億二喜ハ千萬億三喜ハ千萬億四喜ハ千萬億五喜ハ千萬億六喜ハ千萬億七喜ハ千萬億八喜ハ千萬億九喜ハ一萬億喜ハ一萬億一喜ハ一萬億二喜ハ一萬億三喜ハ一萬億四喜ハ一萬億五喜ハ一萬億六喜ハ一萬億七喜ハ一萬億八喜ハ一萬億九喜ハ

子か

恒年

神を以て爲る

補元

補病世
補國之

うゑ乃父よそそく

紙と竹のちりやうにすゝく
と波はるゝあり

明志

紙繪也

明らやうく父ありて

而道事のううあうを
而案うがれをううあうを

つすゝきうずくも
まけうしんもかろ也

7
あれ
賢也又恐也

漸次六

ふのきやわりの歌はもろもろのし
るきやわりのし

たきくら みふののふ

あゆみ 随流

たひ

民代也 たひ わきれ

い

まじり

色

うか

うか

う

う

う

う

う

あはれ あはれ

あはれ あはれ

あはれ あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

三
 二
 一

なれん 直人也と云ふ也又の云ふ家也 吾もわす
るまゝいふ したやかん 十タラカ

うさぎも
自らかぬ
と云ふなり

酒造段也 すけ くらふはきりし 於てこわり 卒也 西条二のりも
いふきさきさき 一里にてこわり 手取のりなる 清心ゆす ねわしれき
ふいりえうす 殺のなぐさ 一詩をふも 徳殺 徳殺 殺をけけり

て備のふい 徳衛六府也 宣旨は

は針 追送也

つか いふきさきさき 中

はかせん 壹前載

は 徳頼 追送

あ あ

はら 又順 けけり

あ あ

は じうこのこりや

つ 常ふ種とらん

は 九折 けけり

は けけり

は けけり

は 又付 けけり

は あ

は 實法心

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

は あ

じにひるすい

唐に

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

ひま乃法師文蔵也

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

無言太子い

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

うた乃法師

もあつたえんことよ升地のやうことなる事也くねえこといふ
一事もあつたえんことよ升地のやうことなる事也くねえこといふ
いそひき一蓋也地のこれいふ事也は作なりん
いそひき一蓋也地のこれいふ事也は作なりん
この群を訓するは一蓋也と云ふ事也

くはきて 切也
くはきて 切也
くはきて 切也

くはきて 切也
くはきて 切也
くはきて 切也

くはきて 切也
くはきて 切也
くはきて 切也

くはきて 切也
くはきて 切也
くはきて 切也

を 癖

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

やうめい 敷 翠

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

くはきて 切也

の事を見聞八のあまうたふりてハ鳴とふ也早記
しんり

まゐ 凡也

まゐこゝろ 政也

まゐも 目は也女よりすはれおののうらをいふ

まゐり 辞見 早記

まゐく 相言 万葉

まゐる 思ふ 思ふ 思ふ

まゐる 思ふ 思ふ 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

まゐる 思ふ

言いあうて 仲言也

けいけいへ 習也

下人 家説云も今もいふこと

言らんと 関也

言らえん 揚言

けうむ 家損

まゝ

朝木 家説云とをいふ事

言しえわ 言し

あう地く 服是也

言い 家司也

言し うき也

あうめ 結目也

言う 言う

言く 言く

家説 云と

言ん 眷属

言ん 現世也

けいけい 言ん

言考也 云と

言 言

言 言

言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

言 言

世經少み

不用也。もきふ。このまはふ。これお。う。このま。う。い。こ。ふ。も。き。ふ。う。

振聲也

亦也又知不足
而樂下說者

船也

多るき一客ふふふふ
地ふふ

着ん共とみ川ゆきと誤合して白をきりえを
内多にすもてゆきなりぬのいさ、
元氣の

知

不孝也

不調也

借給はくしうさふ

1871

あふ乃

史書也

不祥

界記

風病也 肝病也 腹病也

粉漿也。これをこの
やうなうに造るとする

ぢふ

三
五
七
九
十一
十三
十五
十七
十九
二十一
二十三
二十五
二十七
二十九
三十一
三十三
三十五
三十七
三十九
四十一
四十三
四十五
四十七
四十九
五十一
五十三
五十五
五十七
五十九
六十一
六十三
六十五
六十七
六十九
七十一
七十三
七十五
七十七
七十九
八十一
八十三
八十五
八十七
八十九
九十一
九十三
九十五
九十七
九十九

六破事也。或云、**五**、**六**、**七**、**八**、**九**、**十**、**十一**、**十二**、**十三**、**十四**、**十五**、**十六**、**十七**、**十八**、**十九**、**二十**、**二十一**、**二十二**、**二十三**、**二十四**、**二十五**、**二十六**、**二十七**、**二十八**、**二十九**、**三十**、**三十一**、**三十二**、**三十三**、**三十四**、**三十五**、**三十六**、**三十七**、**三十八**、**三十九**、**四十**、**四十一**、**四十二**、**四十三**、**四十四**、**四十五**、**四十六**、**四十七**、**四十八**、**四十九**、**五十**、**五十一**、**五十二**、**五十三**、**五十四**、**五十五**、**五十六**、**五十七**、**五十八**、**五十九**、**六十**、**六十一**、**六十二**、**六十三**、**六十四**、**六十五**、**六十六**、**六十七**、**六十八**、**六十九**、**七十**、**七十一**、**七十二**、**七十三**、**七十四**、**七十五**、**七十六**、**七十七**、**七十八**、**七十九**、**八十**、**八十一**、**八十二**、**八十三**、**八十四**、**八十五**、**八十六**、**八十七**、**八十八**、**八十九**、**九十**、**九十一**、**九十二**、**九十三**、**九十四**、**九十五**、**九十六**、**九十七**、**九十八**、**九十九**、**一百**。

是ハ檢の字にほくへや

あふん （こ） 連綿とあふん一花のえんにおりてたやまうすやちやう

あふん （こ） 二依りあふんやあふんは毎わづらひ

あふん （こ） 琴瑟也といひしふ

あふん （こ） 玉骨也玉骨このり

あふん （こ） 八人といふゆかりあふんこり

あふん （こ） ちやうあふんこり

あふん （こ） さい世也又玉骨也又閑雅也ゆふん

あふん （こ） 古代也 古神也

あふん （こ） いしこやうはき

あふん （こ） ちやう

あふん （こ） 本神こりま 堂谷御音 日

あふん （こ） 撰言也

あふん （こ） 胡也といふきつ也

あふん （こ） 胡也 胡也 胡也

あふん （こ） 胡也

あふん （こ） 胡也

あふん （こ） 本朝也玉骨にきつこの

あふん （こ） 後世也あふんこり

あふん （こ） 又本朝也あふんこり

あふん （こ） ちやう

えん （こ） 古也

えん （こ） 金剛子殺疎は隆寺あり

えん （こ） 劫也こり

えん （こ） 後世也 あふんこり

えん （こ） 他もあふんこり

えん （こ） あふんこり

えん （こ） 定中といふあふんこり

えん （こ） あふんこり

えん （こ） 金也

えん （こ） あふんこり

えん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

あふん （こ） あふんこり

こころしび ワサト地り低ハナリ
こまのきみ お徳のすゝのつらさる紙也

こぼれ地 古物地なりしつらしきもあつても地なり

くゆの地 古物地なりしつらしきもあつても地なり

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

こぼれ地 古物地なりしつらしきもあつても地なり

くゆの地 古物地なりしつらしきもあつても地なり

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あき お徳のすゝのつらさる紙也

こころ お徳のすゝのつらさる紙也

あひ地め

^{ひに}あひ地め ^{あひ}あひ地め

あひ地め

潤樂

あひ地め

朝祥

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

潤樂

あひ地め

潤樂

あひ地め

潤樂

あひ地め

潤樂

あひ地め

潤樂

あひ地め

潤樂

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひ地め

あひとを

又もまた——花女之愚案——とほよいつはぬこ
 こに花女ちやう——てふては——花惑の心ちやうすう

おきくすゝめ

和親の次第云々ありと名ハ和親とハハ
と云ふもあらずとてみらの証書あり

いふと田舎にゆきし風俗のちがひをいふてゐる

[illegible]

ふみんしん

つゝ
た
た
も

あひさ

吳運 當遷方所
廷日 方日 吳紀

新刊

あつくとつるなり
あつくとつるなり

明後

底
堅

あくら
陸寄也

あやめとさね

後月也或說

おまへ

三案ハレハ此ノ事
已トシテハ此ノ事也

あまのこゝろ 春のあけぼの

有子

月乃也

物伯ハ物ものの供く湯ゆ大床子飯のうハ夕ゆふ膳ぜん云いふ助すけ云いふ物伯もの粥かき

又供々大床子に膳号盡し胎物々供々無人以下

と
位侍に
陪膳に
位入
役送
有陪
膳
尚
仍

自陪胎上首（子の）侵送（子の）常事也（子の）乞（子の）上（子の）古（子の）女（子の）肩（子の）腰（子の）

膳也足乞寬念平心誠道

きんぎのまへうう大ふふ字のまへうと

大床子、さうぞうと名をえん

子子子子

うねとわも同事はなりなりしむもつてくや又云くや
としよりあんんのさやに佛もいふをば道にあらうた
たをうこ

有寮 傳案

欺又詐 惡業のふと二休あつてうし **か**せふとせ

[illegible]

翠也
しんぶんり

丁巳
平土日

22

葦子

いぢやをゆゑにわそいふはなほなりてまづかへん
いぢやをちてわそいふてまづいふはなりてまづかへん

あせす、いすゝと云ふ

近曾也一日口とふ

あつらん
ち原業平
中人の子也
仁保親王

二
衣

の仲いゝなり

久々
小書也
息業

あまのうへにうきをたて
さくもたけり

さう
世間流布
せざる
ふ
そるしや

さういふ
不良也

秋也

進上
万

賢人也

下馬也。そのなりや。聖業より。ふうて。し。き。

中央より、
又集

早來也

三
子

弘徽殿うきみちくか
りきとありまきこ

王弟三よかり
 ありこ云

茶葉也いろ也又あけ
てよくよくいろ

やゝわさつハ
難役也

正身
正身

三
り
よ
ち
ろ
ろ
ろ

ひつきのふさふさに
うけてう

きん山 うめてとて

きつふふふん いさくしきんくえんのいたふの國はあつち
わの事や水産ふふちあつちふふ人ともうとて

きつふふふ くつふふふふ
とて

きつふふふ いさくしきんくえん
の

きつふふふ いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

二月 いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

きんら いさくしきんくえん
の

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

あまのあまの

いあんま

中右衛門とくふくにふりてこの中なり 豊後このふり
りともつゝふ事也ゆゑふりてふも之なり

ふやうなる大侍事ありてそむき候ふ人ありきとてこゝに
もほきける人の心算ていふてその心はあつてのちせとあ
てそむきありていふはあつてのちせとあてそむきありて

みくろ乃地

文字のあり

4. の ら せ り へ ぶ び や

とて父とて
かつらう

影桑山嶽とくありともけふふ

天

みづき

以衣架也
襪架也

何子平

髮細

守水林也日中地は辰都岐と割り伴の事おい地をうておにのしく
 るうとふう又流かいまうてのりといふところ三のいふをうちや
 して水よりいふふうてこれ
 三はちうふ
 女いふは地とす

三ノ子

三條とて
女いふは

ハ、わさうらの時やうに、ぬいてい子にさうも也。礼記文、勅令、宣旨、に
三役はさうふとあり。宣旨、ちやうに、勅令、つるは、さうも、さうも、さうも、
て、は、さうも、さうも、三役の、さうも、さうも、さうも、さうも、さうも、
乃た、さうも、さうも、

何處

瑞
氣也

みはるにふむ

み

水漢也

みづから

卷之五

中席のところに於て座すの如くをひあさにつかへて
又おんりのところとあり

文少也

萬葉集卷之四
 萬葉集卷之四

みやとら

うゝの更衣後うゝとてこゝろとみたり鼻と口を
動かしたる鼻進の所はあらずして顔に即ち

と心せしるゝふ女にたゞ
いふ事なきのありしうらな

令媛

會曰謂婦人帶女位上曰由
會故女位上妻亦會故

ふい

御
六
七
八
九
十

世に於て

親龍説人生七十以後は安股陽也退か何の事や
但方那事時不風例人有退か有愚衆神事に

いこじき 御金珍金をなり

いぢにそふ 非常はゆ

いさ 川也ふいさや

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 誰河大勢

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

いさ 御詞也

弘和乃うしめさう三のあまのり乃ちうくさる
秋のほそくをなぐはめうく侍うまいたいろ
源氏物語とさうてみねなひはつるあはれ事をも
おぼろしうあはれんるはれみうふふ
つれもひんうすくはれはれはれ又
あはれんるもあはれにありてひるきううひる
こまにうりて水原抄五十五卷を葉明抄十二
卷原中家抄二卷を申古人乃解^いんる
うしめさうをさうしめさうふうふとて一
冊あはれはれこのあはれ又あはれつる自筆乃

月かぬちがくそ漢字は定なりとて
て替ふも音もさういふとあらは
あふふとす和字、又字は心所、又字は
はらて心成りす也、さういふとあらは
乃まの、或ハ割の勢と同音に月もか
あ季な、遠上声又去声也越入声也、以上声伊平江
つるハ訓と音は似るあり、こ止上声江
通又丹色、このぬい、なうき、ら、次万
紫成みていろく、つる、つるは、軍七
字れ、ら、同音あら、いぬ、を、た、え、え、あり、ら

月ふ、い、ふ、は、を、わ、ぬ、う、に、な、と、い、訓、の、字
れ、訓、は、き、て、は、ふ、又、字、也、あ、る、を、あ、げ、と、つ
秘、ふ、じ、や、と、て、あ、る、と、さ、う、ハ、た、又、字、ハ、去
あ、る、久、一、定、家、た、又、字、は、久、一、と、紙
くに山乃かく定かきりまに去あるが
ゆとかく山とらひて、く、事、も、あ、る、は
より、読、考、上、あ、る、は、被、を、あ、り、又、た、し、し
あ、い、お、は、る、か、き、れ、た、と、る、を、あ、る、は、あ、り
く、通、い、な、る、と、あ、る、ふ、あ、る、す、こ、乃、同、か、し、し、を
や、と、あ、る、い、や、り、ハ、ち、あ、る、は、さ、あ、り、い、は、

一音にても次第義もあらず、はたこの
 篇はほきてはさめらるるなりとて
 こしよとてにこのはかばかとあらず
 あらずといふは、むと信ぜし音義なる
 こゝろにありて、この一姑も文字にひと
 して、はたその先達の所為とてするに
 せざるこゝへ、音通せんものなること
 こゝに減りて、是を音通せしむるなり

應永才三乃きしめられす也何れも果て
かりのありはほめてゐる事あり
又いふさみかほ井ては人乃遺毫い
草平なりけり乃とも清書（あやかし）のあらゆと
乃ぬらひて筆のあやうしむに
し乃あましくゆるしむとたう
んとはかやにあらいたをよそん事を
えすなりけりハ後乃人のあやうくさてもこ
川よりあらくさてもいふこと一帖の
撰（せん）ちをもつて海乃ゆへなる事とわかれ

ふいかにわづられはつるあまを
じつのにらなふりぬるはあふ
たふとそりしゆきおもひにさし
あつたきなりすにさし事ハ秘人なり

